# Japanese Association of Supportive Care in Cancer

日本がんサポーティブケア学会 ニュースレター

News Letter **No.7**

2023.11



一般社団法人 日本がんサポーティブケア学会

Tel: 03-5422-3447 Email: jascc@jascc.jp

URL: http://www.jascc.jp


## 目次


**第8回JASCCと MASCC/JASCC 2023を終えて～その準備から開催まで～** …… 2

齊藤 光江 (第8回学術集会大会長 順天堂大学医学部乳腺腫瘍学講座 特任教授)

**最優秀演題賞を受賞して** …… 4

神谷 早織 (社会福祉法人 聖隷福祉事業団 総合病院 聖隷浜松病院 薬剤部)
則竹 淳 (湘南鎌倉総合病院 予防医学センター / Panacee Medical Center, Integrative Cancer Center)
森田 充紀 (兵庫県立がんセンター腫瘍内科)
渡邊 清高 (帝京大学医学部内科学講座 腫瘍内科)

**第9回(2024年)学術集会に向けて** …… 7
**"私たちの 夢をかなえる がん支持医療"**
**(Cancer Supportive Care Makes Our Dreams Come True)**

渡邊 清高 (第9回学術集会大会長 帝京大学医学部内科学講座 腫瘍内科)

**Immuno-Oncology ワーキンググループ設立のご報告** …… 8

山本 信之 (和歌山県立医科大学 呼吸器内科・腫瘍内科)

**2023年 JASCC刊行物**
**「よくわかる老年腫瘍学」** …… 9

唐澤 久美子 (東京女子医科大学 放射線腫瘍学)

**「がん薬物療法に伴う末梢神経障害診療ガイドライン 2023年版 第2版」** …… 10

吉田 陽一郎 (福岡大学病院)

**「患者さんのためのがんのリハビリテーション診療Q&A」** …… 11

辻 哲也 (慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室)

**平山泰生先生を偲んで～CIPNの未来を切り開いた男～** …… 12

吉田 陽一郎（福岡大学病院）

**編集後記(広報・渉外委員会 委員長)** …… 12

宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学附属病院 腫瘍センター センター長)

# 第8回JASCCと MASCC/JASCC 2023を終えて～その準備から開催まで～

順天堂大学医学部乳腺腫瘍学講座　特任教授　齊藤 光江（第8回学術集会大会長）

## スリル満点の準備期間

長い準備期間と多くの皆様のご協力で、2023年6月22日～24日in NARAの学術集会と25日の市民公開講座in NARA & TOKYOを無事開催・そして終了することができました。当初開催予定であった2021年が感染拡大で2年の延期、前代未聞と言われた学会屋さんの直前になっての突然の業界撤退など、国際学会との合同開催という大きな期待の裏で想定外の災難が重なりました。ようやくHPや演題受付、共催受付、参加受付など、急遽頼んだ学会屋さんとの実務レベルの作業が稼働し始めた時期は、通常ならそれらの締め切りが見え始めている時期でした。よって、プログラム完成も開会前日にまでずれ込むという、通常ならありえない展開でした。しかしそんな状況でも、ぎりぎり開催にこぎつけた影には、順天堂大学乳腺腫瘍学講座秘書の槻谷由子さんと福元美波さんの多大なる貢献がありました。また、MASCC側の不安を煽らずに、日本の流儀への理解、そしてこれらの難局を共に乗り越えるための協力を乞うには、常に海外との交渉の際にそばにいてくれた国際委員の入村達郎先生やその秘書のヤーネス聖子さんの存在は大きかったです。一方、トロントのMASCC本部とアデレードのMASCC大会長のIan Olver先生との打ち合わせ会は、これらのハプニングに翻弄されることなく、毎月第3火曜日の日本時間早朝に2年近くルーチンとしておりましたので、MASCCとの合同共催部分（プレナリーセッションやparallel session）のアイデアやコンテンツの絞り込み、運営方法や費用負担の分配などの相談は着々と進められ、常に静岡県立がんセンター呼吸器内科の内藤立暁先生がお付き合いくださいました。多職種で患者さんにも入って頂いた多様性のあるJASCCのプログラム委員会立上げや、テーマの確定、演者や座長の選定なども順調でした。また、奈良という主催者からは離れた土地の開催にて、現地協力隊として、奈良県観光局MICE推進室のオードネル裕美子さん、山本佳奈さん、そして奈良県立総合医療センター総合診療科の東光久先生と前述の秘書さん、そして新旧交代やブランクの時期はあったものの、学会屋さんと職場仲間で腫瘍内科医の渡辺純一郎教授で結成したチームも毎月打ち合わせ会を実施できました。コロナ禍で先の見通しが立たない時期ではありましたが、現地開催という大博打を打ったにもかかわらず、海外からの参加者は、ほぼコロナ前と同じ規模となり、国内参加者は、例年よりは1割ほど少ない数となったものの、全体では会場の最大収容人数である1500名に達し、活気に満ちた大会となりました。学会会期中は、順天堂大学と静岡県立がんセンター、次期会長渡邊清高先生の帝京大学からボランティア総勢25名の多大なるご協力を頂きました。

## メインテーマ

一番の醍醐味は、MASCCのstudy groupとJASCCの部会の過半数が戸惑いながら、開催1年前から始めた合同ミーティングです。MASCCのparallel sessionへのテーマ提案のために、これまで試みたことの無いオンライン国際会議に挑戦していただきました。結果、その大半は採用になり、MASCCのセッションに指定演題でかなりのJASCCメンバーが登壇することになりました。また、MASCCのプレナリーセッションは、第一日目のロボティクスにおいて、奈良先端科学技術大学院大学の神原誠之先生、自治医大外科の川平洋先生、九州工業大学大学院の柴田智広先生、日本のベンチャー企業による支持医療への工学技術の導入の最先端情報を紹介いただき、科学技術大国としての日本の存在意義が確認されたのではないかと思います。二日目は、伝統医療とEBMの遭遇というテーマで、漢方薬の進歩を高松赤十字病院腫瘍内科の西内崇将先生に語って頂きましたが、支持医療だからこそ見直されている伝統医学について、新しい気づきに満ちたセッションだったのではないかと思います。三日目は、医療格差の問題を奈良県知事を4期勤められた荒井正吾さん、PMDAの国際委員長を務められた佐藤淳子さんらに、日本からの代表としてお話頂きましたが、これまで為政者や規制当局から見た、医療格差の是正とそのモデルというような話を聴く機会は乏しかった中、とても有益な時間だったと好評を博しました。

JASCCは、支持医療の温故知新をメインテーマとし、古きは漢方の応用、新しきは医工連携,Big Data やPPI（patient public involvement）、Exercise Oncology, Stroke Oncology, 支持医療認定制度Kick off、終末期のがんリハビリ、チーム医療のbeyond evidenceを、定番は、がんと就労、骨転移カンファレンス、研究発信として、日本発のがん支持医療研究や会長のセレクションで、3つの際立った若手による研究（超音波発毛、末梢神経障害のメカニズム解明、iPS細胞を使用した心障害解明）の報告と表彰、そしてJ-Supportの研究相談会などを催しました。また、がんサミットとして癌関連学会（癌学会、がん治療学会、臨床腫瘍学会、JASCC）の理事長と奈良県立医大地域医療講座教授の対談形式で、地域間格差の是正に関するディスカッションを行いました。

恒例のyear in reviewは一つの会場で通して聴ける形式にしました。ポスターセッションは、企業展示の会場で、e-poster形式で二本仕立てとし、一方は患者さんに親しみやすいテーマ、もう一方はより専門的なテーマとしました。優秀演題はMASCCの会場でも英語で発表する機会が与えられました。企業展示は、スタンプラリーとし、訪れた人々がほぼすべての展示を閲覧するというしくみにスポンサーの皆様のモチベーションが上がったのではないかと思いました。市民公開講座は、奈良と東京を結び、次期会長に繋げる企画となりました。

全体を通して貫いた縦糸は、奈良という土地にちなんだ伝統と日本が誇る科学技術という時間軸で支持医療を網羅する、まさに温故知新、そして横糸として海外と繋がる、日本の各地域、様々な職種や立場の人が参加するという多様性でした。患者さんや市民の方々には、がんのエピソードに因んだ美術作品の展示を絵画コーナーと写真と音楽をビデオで流し、和紙工芸をホワイエで展示しました。幕間スライドは、企業を一部とし、ほとんどを教育者、音楽家、森林保護活動家、能楽師、心理士、地域医療に貢献する医師らによって作成いただき、全ての会場で繰り返し流しました。そして多くの方々が感想で述べて下さいましたように、久しぶりに海外の学会に参加したようなワクワク感の中、3年ぶりのface to faceで出会う人々との交流を通して、エキサイティングな3次元空間をお楽しみいただけたのであれば幸いです。最後に、このような機会をお与え下さったJASCCやMASCCの役員の方々、本学会の開催にあたり様々な形でご支援ご協力くださった皆様に謝意を表したいと思います。また本学会は、内閣府の協力のもと日本学術会議の共催で行われ、開会式では岸田総理のメッセージも頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

写真は上から、会期前夜の会長招宴、開会式、順天堂チームの事務局風景です。

## 最優秀演題賞を受賞して

**社会福祉法人　聖隷福祉事業団　総合病院　聖隷浜松病院　薬剤部　神谷 早織**

この度は第8回日本がんサポーティブケア学会におきまして、最優秀演題賞という大変栄誉ある賞を頂きまして、大会関係の先生方に心より御礼申し上げます。

今回「手足症候群における日常生活への影響を踏まえた重症度評価に対するスキルアップ研修の有用性の検討」という演題で発表致しました。

スキルアップ研修会は、がん薬物療法を受ける患者に対して薬剤師が適切な指導や介入を行うために、2021年6月から病院・保険薬局薬剤師を対象として行いました。特に重症度評価が難しいとされる手足症候群を題材に、計5回症例を変えて行いました。

手足症候群の重症度は、見た目に加えて、生活への影響を踏まえた患者自身が感じる重症度を合わせて評価することが非常に重要です。この研修会では患者の主観的な重症度を探るための質問内容を学ぶため、事務局が患者役となり、参加者が症例写真を見て、患者に聴取したい質問について事務局とメールで会話することで実際の患者指導を擬似的に体験し、参加者がより能動的に取り組めるようにデザインしました。

具体的な研修会の流れは　①症例の患者背景の一部と手足症候群の写真を確認②症例患者に質問したいことをメールで事務局に送信③返信内容を踏まえて症例の重症度を評価④web勉強会で答え合わせ、具体的な指導や対応方法を確認　となっております。

研究の結果、第1回と第5回の副作用評価における正答の割合は第5回で有意に上昇しました。また、参加回数が多いほど正答の割合の推移も高く上昇する結果となりました。

支持医療の処方箋を受け取る保険薬局薬剤師が患者に適切な指導と院外でのフォローを行い、病院薬剤師と連携してそれを外来へ伝えることで、より安全で有効ながん薬物療法が実現できると考えます。現在は手足症候群に限らず、がん薬物療法に対する副作用に範囲を広げて上記取り組みを継続しております。

地域連携という今後発展していく分野で、この賞は私たちの研究の重要性と成果を認めていただいた証であり、非常に嬉しく思います。この研究を進める中で大変お世話になりました三木医師をはじめ、聖隷浜松病院　薬剤部　研究支援チームの皆様に厚く御礼を申し上げます。今後もさらなる研究に取り組み、医療の質向上に貢献していきたいと思います。

## 最優秀演題賞を受賞して

**湘南鎌倉総合病院 予防医学センター / Panacee Medical Center, Integrative Cancer Center**
**則竹 淳**

2023年6月に開催された第8回日本がんサポーティブケア学会学術集会において、最優秀演題賞という栄誉ある賞を頂けましたこと大変光栄に存じます。 今回は「がん治療を中心としたタイ王国と日本の国際医療連携」という演題で日本とタイの医療事情の違いとがんをはじめとする疾患治療の国際連携について発表をさせて頂きました。

毎年400万人を超える外国人患者を受け入れ、医療ツーリズム先進国として確固たる地位を築いているタイでは医療先進国の医学部を卒業した医師や病院で研修をした医師が多く勤務しているため、欧米や日本と遜色のない高度なレベルの治療が提供されています。新型コロナウイルスの流行により医療ツーリズムは大きなダメージを受けましたが、病気を予防し、健常者が健康状態を改善・維持するウェルネスが注目され始めウェルネスツーリズムが台頭してきています。

一方でタイの大きな医療事情の一つに公立病院と私立病院の間の医療格差があげられます。医療ツーリズムもウェルネスツーリズムも私立病院が主導で展開されていますが、ほとんどが自由診療のため高額な治療費が問題になっています。特に、近年増えている外国人のがん患者さんが治療費を払えずに途中で治療を中止したり、医療レベルが低い病院に転院せざるえない状況が多くみられ、タイでは患者さん中心の医療体制で整備されているとは言い難い現状です。

日本では2018年に様々なバックグラウンドや職業の人たちが参加し、“患者さんにやさしい、患者さん中心の医療体制の実現”を目指す支援機関として、International Society of Patient-Centered Oncology Science (ISPACOS) が創設され、2019年には海外の日本人患者さんをサポートするために、初の海外支部がタイに設立されました。現在はカンボジア、インドネシアにも支部が設立され、日本本部と定期的に会議を行い、年に2回、タイと日本でシンポジウムも開催し、世界の医療事情を発信しています。また、日本で治療を希望する患者さんには医療機関を紹介する活動も開始しています。今後は国内外でより患者さんを中心とした医療環境が整備されるように、ISPACOSのネットワークを広げていきたいと思っています。

末筆ながら、本発表に携わっていただきました全ての方々、また本演題を評価いただきました学会関係の先生方に改めて深く御礼を申し上げます。

## 最優秀演題賞を受賞して　『日本がんサポーティブケア学会との出会い』

**兵庫県立がんセンター腫瘍内科　森田 充紀**

第8回日本がんサポーティブケア学会において最優秀演題賞をいただき、また合同開催の国際がんサポーティブケア学会でも発表の機会をいただけたことは身に余る光栄でございます。
今回、『12年間にわたる当院外来化学療法センターでの過敏性反応（HSR）の実態と再投与についての検討』というテーマで、延べ142,894例のうちHSRを発症した575例について後方視的に調査した結果を発表させていただきました。本研究の詳細は割愛させていただきますが、HSRの発症頻度や発症様式・好発時期などを知ることでより安全に化学療法を行うことができ、再投与を検討する際にも役立つ内容であると自負しております。単施設の後方視的研究ではありますが、これまでの報告の中でも最大規模のデータであったこともご評価いただけたものと存じます。これもひとえに一例一例を丁寧に診察し記録し続けてきた、兵庫県立がんセンターの外来化学療法センターのスタッフの皆様の賜物であり、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

発表当日の会場では多くのご質問もいただき、大変議論も盛り上がりました。良い意味で敷居が高くなく、アットホームでありながらグローバルな楽しい学会でした。高いモチベーションをもった多職種・いろいろな立場の方が一堂に会して、日々のがん医療において困っていることや工夫されていることなど様々な視点で話し合える雰囲気があり、まさにチーム医療を具現化したような素晴らしい学会に出会えたことは私にとって最大の収穫でした。これからもこの学会の中で多くのことを学ばせていただき、より良い支持医療の普及に努めていきたいと思います。

大会長の齋藤光江先生をはじめ、皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 最優秀演題賞を受賞して
## がんのチームケアと地域連携を推進する教育プログラムにおけるコアコンピテンシーの提案

**帝京大学医学部内科学講座　腫瘍内科　渡邊 清高**

2023年6月に奈良にて、第8回日本がんサポーティブケア学会学術集会が国際がんサポーティブケア学会（MASCC）との合同開催にて盛況にて開催されましたことを心よりお慶び申し上げます。新型コロナウイルス感染症という未曾有の事態のなか、充実した議論と情報共有になりました。アジア初の開催に向けて日本からのサポーティブケアの発信を先導された齊藤光江大会長をはじめ学術集会関係の先生方、JASCC佐伯俊昭理事長はじめ会員各位のご尽力の賜物と感謝申し上げます。このたび、栄誉ある第8回学術大会の最優秀演題賞をいただきまして、大変光栄に存じます。

2022年10月にJASCCの部会・ワーキンググループはじめ多くの先生方のご支援のもと、「がん支持医療テキストブック サポーティブケアとサバイバーシップ（The JASCC Textbook of Cancer Supportive Care and Survivorship）が発刊されました。2023年3月に策定された第4期がん対策推進基本計画において、がん治療とそれに伴う有害事象の管理やケア （支持医療）の密接な連携 ・統合とそれを可能とする仕組みが求められています。こうした動きを踏まえ、JASCC教育研究開発ワーキンググループでは、「がん患者のための多職種チームケアと地域医療連携を推進するプロジェクト」を開始しています。がん医療やケアに関わる医療従事者が持つべき能力（コンピテンス）と構成要素（コンピテンシー）を分かりやすく提示し、目標として設定しました。これにより、がん医療とケアを学ぶ関係者が目標を共有し、到達までを評価することで、学修成果（アウトカム）を達成するための道筋（ロードマップ）を示すものとしています。患者中心の視点、コミュニケーション、医療とケアの安全、社会制度と関連法規、健康・医療の知識、医療・ケアの実践、そしてEBM・研究の7カテゴリーにわたる19の項目について、多職種からなるグループの合意を得ました。今後、到達目標についてより広く意見を聴取するとともに、支持医療のさまざまな領域において教育研修プログラムを開発することとしています。

質の高いがん診療とケアの実現には、がんを患った方々のライフコースに寄り添いながら、刻々と変わるニーズに対して、根拠に基づく医療を届けていくことが求められます。そのためには教育や研修、そして普及のプロセスが重要になります。本プロジェクトでの成果を今後もJASCCの会員の皆さま、そして国内外に広く発信し、数多くの部会・ワーキンググループの先生方と、モデルとなる教育や研修開発につなげていくことに取り組んでおります。引き続きのご支援、ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

# 第9回（2024年）学術集会に向けて "私たちの　夢をかなえる　がん支持医療“ （Cancer Supportive Care Makes Our Dreams Come True）

**帝京大学医学部内科学講座　腫瘍内科　渡邊 清高（第9回学術集会大会長）**

第9回日本がんサポーティブケア学会学術集会(#JASCC24)を2024年5月18日（土）・19日（日）に埼玉会館（さいたま市浦和区）にて開催いたします。

この本学術集会は、国際がんサポーティブケア学会（MASCC）とJASCCが合同にて、盛況にて開催された2023年の集会での議論を受けて、わが国そしてアジア太平洋地域に向けてがんサポーティブケアの最新の知見や成果を発信するものです。

がん対策推進基本計画は4期目を迎え、質の高いがん医療とケアを患者さんに確実に届けていくための取り組みが求められます。JASCCでは、科学的根拠に基づき、がんの支持医療の包括的なテキストブックを2022年に刊行しました。質の高いがん診療を実現するためには、がんに関連するさまざまな症状・徴候、がん治療に伴う有害事象に対して、エビデンスに基づく支持医療を多職種からなるチームの連携のもと実践することが、患者さんのQOLを改善し、生命予後やWell-Beingを向上することにつながります。たくさんの医療現場での声、臨床研究などでの患者さんの参画のもと、がん治療そしてがん支持医療は、効果的で、安全で、QOLを保ち、持続可能なかたちを指向するものと考えられます。

第9回学術集会では、質の高いがん医療と支持医療が、患者さんがどこにいても、どんなときも確実に手に届くことで、よりよいアウトカムにつながることを目指すテーマとして**「私たちの　夢をかなえる　がん支持医療（Cancer Supportive Care Makes Our Dreams Come True）」**としました。がんの支持医療についての最新の研究報告、シンポジウム、症例検討、ワークショップ、パネルディスカッション、特別企画などの豊富なプログラムに加え、がん支持医療の現場での実践につながる教育研修セッションを企画しております。プログラム委員の先生方、そしてJASCCの部会・ワーキンググループ・委員会の皆さまから、数多くの魅力的なプログラムをご提案いただいております。

JASCCの幅広いテーマからなる部会・委員会・ワーキンググループの皆さま、学会員の皆さまのご支援をお願い申し上げますとともに、多くのご参加の皆さまと「夢を語り合う場」をご一緒できることを心より楽しみにしております。

2024年2月17日（土）には、プレイベントとして**「がんになっても尊厳をもって安心して暮らせる社会へ　2024」**をテーマに市民公開講座を帝京大学板橋キャンパス（東京都板橋区）にてオンラインとのハイブリッドにて開催します。患者・当事者の視点は、がん支持医療の領域でますます重要になってきています。今大会から新たに始まる、**患者・当事者参画プログラム（JASCC-PPIプログラム）JASCC Patient-Public Involvement and Partnership Program**）として、患者・当事者の視点を企画段階から組み入れた協働プログラムを企画しています。PPIプログラムにご参加いただいた皆さまからの発表、立場の垣根を越えた情報交換や議論ができるセッションを準備しています。

JASCCの幅広いテーマからなる部会・委員会・ワーキンググループの皆さま、学会員の皆さまのご支援をお願い申し上げますとともに、多くのご参加の皆さまと「夢を語り合う場」をご一緒できることを心より楽しみにしております。

第9回日本がんサポーティブケア学会学術集会（#JASCC24）ホームページ
https://www.jascc2024.org/

演題募集のお知らせ
https://www.jascc2024.org/cfa.html

プレイベント「市民公開講座　がんになっても尊厳をもって安心して暮らせる社会へ　2024」
帝京大学板橋キャンパス（東京都板橋区）会場とオンラインのハイブリッド
https://www.jascc2024.org/public_lecture.html

## Immuno-Oncology ワーキンググループ設立のご報告

**和歌山県立医科大学　呼吸器内科・腫瘍内科　山本 信之（Immuno-Oncology WG　WG長）**

この度、Immuno-Oncology(IO)ワーキンググループ(WG)を立ち上げ、WG長に就任いたしました。ニボルマブが悪性黒色腫に最初に承認されてから、今や免疫チェックポイント阻害剤は、各種がんの標準的治療方法に組み入れられ、大きな柱の一つとなっています。ただ、免疫を介在する治療方法であるため、その有害事象も多種多様であり、その対処方法もこれまでとは異なることが多いです。そのため、医師、看護師、薬剤師等でのチーム医療はもちろんのこと、Oncology関係以外の診療科との連携も必要になりますが、治療方法・検査方法とも十分にエビデンスが確立しているとはいいがたいです。

本WGの特色は、施設参加としてメンバー枠をつくり（数施設は、看護師・薬剤師・医師等のチームで参加）、真にチーム医療としてのIOサポーティブケアのエビデンスを構築することにあります。このWGから発出される情報が、IOの標準的医療の確立に少しでも貢献できれば幸いです。

# 2023年　JASCC刊行物　「よくわかる老年腫瘍学」

**東京女子医科大学　放射線腫瘍学　唐澤 久美子**

本書は、厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）、「高齢者がん診療ガイドラインの策定に必要な基盤整備に関する研究」班（2018～2020年度，研究代表：田村和夫先生）が３年間にわたり実施した事業の結果、診療指針策定にあたり基盤となる学問としての老年腫瘍学のテキストブックの必要性が浮き彫りになったことから企画された書籍です。田村班を引き継いだ「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」班（2019～2022年度，研究代表：佐伯俊昭先生）が作成し、その成果物であるテキストブックを日本がんサポーティブケア学会（JASCC）が引用する形で出版することとし、JASCC教育委員会の企画案検討から査読までの協力を得て協働で作成させていただきました。

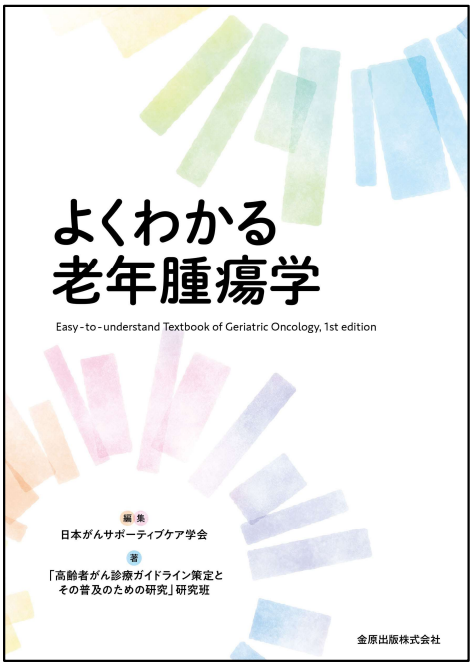
わが国のがん患者に占める高齢者の割合は7割以上、がん死における高齢者の割合は８割以上であり、年々増加しています。しかし、臨床腫瘍学の高等教育、臨床現場の診療ガイドラインの多くは、健常成人を標準としており、患者の大半が高齢者であるという現実とのギャップが生じています。
また、高齢化が進行するわが国において、老年医学はすべての医療者が学ぶべき重要な学問分野ですが、老年医学講座を有する医学部・医科大学は多くなく、ここでも現実とのギャップが生じています。
そのような現実の中で、老年腫瘍学を学ぼうとするすべての学生・医療者のためのテキストを目指しました。老年科・腫瘍関連各科・支持療法専門家などそれぞれの分野の専門家が協力して編集、執筆に当たり、原稿は、高齢者がん診療ガイドライン委員、高齢者がん医療協議会委員、関連学会の会員による内容のチェックも受けています。

本書は５章から構成されています。第１章では、高齢がん患者の特徴、何が非高齢者と違うのかを細胞レベルから社会・経済学的背景まで記述し、第２章では、高齢がん患者の主治医として考慮すべき点を、機能評価、機能評価に基づく目標設定と治療法の選択、治療の支持療法、併存症への対応に渡って記述しています。第３章では、がんを持つ高齢者への対応を、 QOLとQOD(quality of death)の視点から記述し、第４章では教育研修制度、第５章では老年腫瘍学領域の研究手法について記述しています。

本書により多くの学生、医療者が老年腫瘍学を理解し、わが国の高齢者がん医療がより良いものとなることを期待しています。

編集　日本がんサポーティブケア学会
著　「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」研究班
発行　金原出版
定価　6,600円（6,000円+税）
発行日　2023/03/20
ISBN　978-4-307-10220-9
B5判・336頁

出版社ウェブサイト
https://www.kanehara-shuppan.co.jp/books/detail.html?isbn=9784307102209



## 2023年　JASCC刊行物
## 「がん薬物療法に伴う末梢神経障害診療ガイドライン 2023年版　第2版」

**福岡大学病院　吉田 陽一郎（神経障害部会　部会長）**

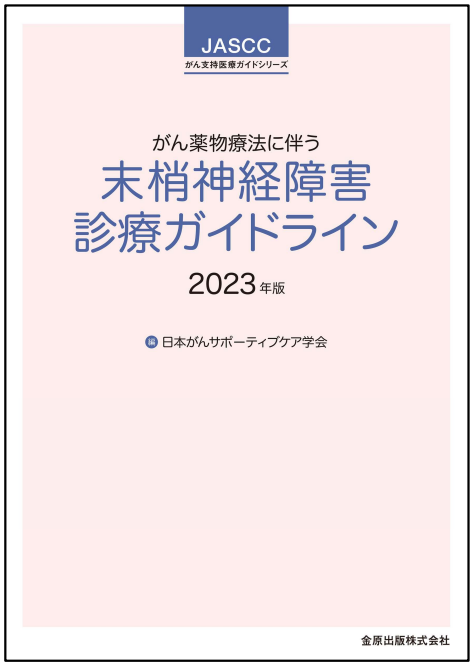
化学療法誘発性末梢神経障害（CIPN）は，神経毒性を有する化学療法後に発症する末梢神経障害であり，主に左右対称の手足の痛みやしびれ感を呈する病態です。しかし、現状では明確な診断基準や評価法がなく、根治的な治療法もありません。また、エビデンスもたいへん少ない状況の中、6年前に神経障害部会で「がん薬物療法に伴う末梢神経障害マネジメントの手引き2017年版」を発行しました。当初はガイドラインを作成するという思いで取り組んだものの、前述の内容によりマネジメントの手引きという形式になってしまいました。

「次回はガイドラインを！」という思いを抱きながら取り組み続け、今回は「がん薬物療法に伴う末梢神経障害診療ガイドライン2023年版」として発刊できることになりました。これは、前部会長である平山泰生先生の情熱と統括委員長を務めていただいた華井明子先生、作成委員長を務めていただいた古川孝広先生の努力の結晶であり、作成に御協力いただいた先生方の御尽力の賜物だと思います。

本ガイドラインは，抗がん薬治療と並行してCIPN発症前から対策する「予防」と一度発症したCIPN症状を軽減する「治療」の2つの臨床疑問より構成され、マネジメントの手引きにはなかった冷却療法や運動療法等の非薬物療法にも言及しております。ぜひお手に取っていただき、みんなの思いを感じ取っていただけましたら幸いです。
よろしくお願いいたします。

編集　日本がんサポーティブケア学会
発行　金原出版
定価　2,420円（2,200円+税）
発行日　2023/06/20
ISBN　978-4-307-20471-2
B5判・96頁・図数：2枚

出版社ウェブサイト
https://www.kanehara-shuppan.co.jp/books/detail.html?isbn=9784307204712



## 2023年　JASCC刊行物
## 「患者さんのためのがんのリハビリテーション診療Q&A」

**慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室　辻 哲也（がんリハビリテーション部会　部会長）**

がん患者さんにとっては、がん自体に対する不安は当然大きいが、がんの直接的影響や治療にともなう生活機能の低下に対する不安も同じくらい大きい。しかし、これまでわが国のがん医療では、身体的ダメージには積極的な対応がなされてこなかった。その一因は，がん患者のリハビリテーション診療に関する包括的な診療ガイドラインが存在しないため，適切なリハビリテーションプログラムが組み立てられないことにあった。

そこで、厚生労働科学研究補助金（第3 次対がん総合戦略研究事業）「がんのリハビリテーションガイドライン作成のためのシステム構築に関する研究」が実施され、公益社団法人日本リハビリテーション医学会 (以下、JARM)と協働して、診療ガイドライン策定作業に取り組み、2013年に「がんのリハビリテーションガイドライン」が刊行された。診療ガイドライン策定を機に、2013年にJARMは、日本癌治療学会がん診療ガイドライン委員会にリハビリテーション分科会として参画することが承認され、わが国のがん診療ガイドラインの一翼を担っている。

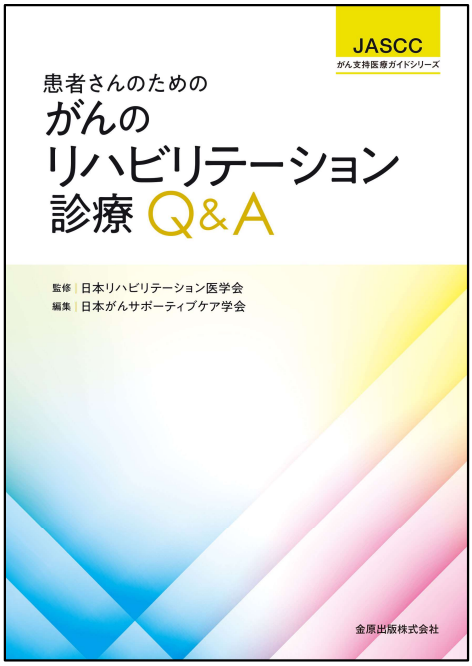
実地臨床に即した指針の提供のためには、数年単位でのガイドライン改訂が必要であり、2016年に、JARMと日本医療研究開発機構 (AMED)革新的がん医療実用化研究事業「外来がんリハビリテーションプログラムの開発に関する研究（研究開発代表者：辻哲也）」との協働にて、改訂第2版の策定作業を進め、2019年に金原出版から刊行された。現在では、日本癌治療学会がん診療ガイドライン（http://www.jsco-cpg.jp/rehabilitation/）や日本医療機能評価機構・Minds（https://minds.jcqhc.or.jp/n/med/4/med0268/G0001129）のホームページでも公開されている。第2版は「Minds診療ガイドライン作成マニュアル2017」に準じて作成しており、がんのリハビリテーション診療についての多方面からの文献を十分に検討するとともに、パネリストには医療側だけでなくがん患者が入ることで、診療の益と害、患者の価値観、コスト・臨床適応性も十分に勘案し、体系化された指針を作成することに努めた。

その後、2020年には、日本がんリハビリテーション研究会（以下、JCR）の編集にて、医療者向けの「がんのリハビリテーション診療 ベストプラクティス第2版（金原出版）」が刊行された。しかしながら、患者さん向けの情報がまだ不足していることから、がん患者さんとご家族を主な読者対象とし、困りごとを解決するために、JARM監修のもと、「がん支持医療ガイドシリーズ」として本学会が編集を担当し、本書を刊行した。策定にあたっては、がんのリハビリテーション部会の部会員とともに、JCR理事や患者団体の方にも協力していただき、総力を挙げて作業を行った。

一般市民向けにQ&A形式で分かりやすく解説された本書が、がん患者さんとご家族のがんのリハビリテーションへの理解を深め、生活機能やQOLの向上に貢献することを期待している。

監修　日本リハビリテーション医学会
編集　日本がんサポーティブケア学会
発行　金原出版
定価　2,200円（2,000円+税）
発行日　2023/06/20
ISBN　978-4-307-75065-3
B5判・120頁・図数：32枚

出版社ウェブサイト
https://www.kanehara-shuppan.co.jp/books/detail.html?isbn=9784307750653



## 平山泰生先生を偲んで　～CIPNの未来を切り開いた男～

**福岡大学病院　吉田 陽一郎（神経障害部会　部会長）**

2022年11月23日に平山先生は突然亡くなられました。

ただ、それは決して突然ではなく、平山先生が病気のことを私たちに伝えずに活動していたこと、直前の11月22日までガイドライン作成のためにメールのやり取りをしていたために、そう感じたのでした。

平山先生とのお付き合いは2015年のJASCC神経障害部会の立ち上げの時からでしたが、弱気な発言等は聞いたことありませんでした。亡くなる1年前のメールには「最近年齢のせいか、以前のような集中力がなくなり、迅速な対応も苦痛になってきております。」と書かれていました。「学会参加は難しいですが、メールでの対応は可能です」とのことでしたので、私は少し体調がお悪いのかなと思っていただけでした。今までガイドライン作成に向けてやり取りした1000通以上のメールを読み返してみると、そういう意味だったのかと今だから理解できるものが多数見られました。

平山先生のCIPN領域における最大の業績は、初代神経障害部会長として「CIPNの未来を切り開いた」ことです。診断基準も明確な治療法もなく、CIPNのガイドラインの作成は難しいというご意見が散見される中、エビデンスが少ない領域にも関わらず「がん薬物療法に伴う末梢神経障害マネジメントの手引き 2017年版」が出版に至ることができたのは、ひとえに平山先生の情熱のおかげです。

「エビデンスが少なく、ガイドラインにするのは難しいですが・・・」と残念がっておられましたが、Mindsのガイドラインライブラリに掲載されることを知って大変喜んでおられたのが印象的です。「次こそは正式なガイドラインを作る」を目標としている中で、「ガイドライン統括委員長の後任はどうしましょうか？」と相談された時、詳細を知らない私は「メール対応だけで構いませんので継続していただきたいです」と返信するぐらい、平山先生を頼りにしておりました。

あれだけ渇望していたガイドラインの完成を見ることなく、平山先生は旅立たれてしまいました。CIPNの未来を切り開いた平山先生への感謝と尊敬をもって、このガイドラインを捧げたいと思います。おそらく今頃、きちんと仕上がっているかどうか熟読されていることでしょう。ガイドライン作成の機会を頂いたからこそ、我々が未来に向けてすべきことが明確化されたと感じています。

平山泰生先生、7年間という短い期間でしたが本当にありがとうございました。あなたがいてくれたからこそ、ガイドラインを発刊することができました。無の状態から１つの道筋を我々に見せてくれました。我々が必ず未来へ引き継いでいきますので、お見守りください。

神経障害部会　部会長　吉田陽一郎
部会員　一同

**編集後記**

新型コロナウィルス感染症がゴールデンウィーク明けから５類感染症となり、第8回日本がんサポーティブケア学会学術集会は、マスク着用義務がなくなった中で、がん支持医療関連学会で25年先輩であるMASCCとの合同学術集会という形で開催されました。私自身はMASCC学術集会には初参加でしたが、多職種によるチームでがん支持医療に対する熱気・パワーがとても印象的であったと同時に、MASCCを身近に感じることができました。またMASCCとJASCCの間で部会レベルでの交流も生まれ、実りのある学術集会でした。

来年の第9回学術集会（埼玉県開催）では、渡邊清高会長がすでにとても多くのユニークかつ興味深い企画をされており、広報・渉外委員会からは、がん支持医療を広く広報・普及させるために行政とJASCCのサステナブルな連携を通して考える企画をいたしました。渡邊会長色のあるとても楽しみな学術集会となることでしょう。

今年もJASCCにおいては、新規WGの立ち上げ、多くの書籍の出版、新規研究がスタートなどなど様々な活発な活動が継続され、組織としての整備も着々と進んでおり、JASCCがセカンドステージに入ったことを実感します。

広報・渉外委員会